

『古代アメリカ』4, 2001, pp. 59-76

<論 文>

テノチティトランの死と再生

岩崎 賢

(筑波大学大学院)

【要旨】

都市とそれを支える宇宙論の研究は、近年のメソアメリカ研究に於ける重要なトピックである。特に天体の運行や、山、洞窟、泉などの自然物が、いかに都市空間の構造に有機的に組み込まれ全体としてひとつの巨大な象徴となっているかという問題は、歴史学、考古学、人類学、宗教学等の視点から総合的に解明が進められつつある。その一方でメソアメリカ専門家のカラスコが指摘するように、都市という自律的宇宙の象徴的時間構造の解明は、比較的遅れているのが現状である。そこで本稿は先スペイン期のメシーカ人の都市、テノチティトランを題材にとり、その時間面に於ける象徴構造をメシーカ人の神話と儀礼との関わりの中から明らかにしていく。具体的にはメシーカ人の重要な儀礼である「新しい火の祭」、及び16世紀のスペイン人による征服の際のメシーカ人の行動を吟味しながら、彼らにとって都市というものが死と再生を繰り返す宇宙としてあり、その死と再生が「籠もり」という特殊な儀礼的行動を通して実現されるものであったことを論じる。

【キーワード】

アステカ、メシーカ人、都市、周期、神話と儀礼

【目次】

1. はじめに
2. 「太陽の石」と都市周期の神話
3. 「籠もり」について
4. 新しい火の祭
5. 征服時の「籠もり」
6. おわりに

1. はじめに

近代社会に於ける時間と、それ以前の伝統的社会に於ける時間とが、顕著な質的相違を示していたことはよく知られている。その相違とは、一言でいえば、時間を逆転不可能な連続として捉える直線的時間と、それが特定の周期に於いて循環するとする循環的時間の相違である。時間が直線的

に進むものではなく、繰り返し循環するものであるとする観念は、狩猟採集から農耕の段階に至るまでの人間的経験に深く根ざしたものである。アタリは近代以前のヨーロッパの大多数の人々にとって「自然は万物の源泉」であり、「時間の流れやその期間・尺度などに関する概念の源泉」であったといい、中世以降に於いても未だ農村部では一日は「日没後」「寝入りの時期」「鶏が最初に鳴いた時」、一年は「苗木植え」「除草」「収穫」といった自然周期の中の具体的な出来事によって測られていたと指摘する〔アタリ 1986: 16〕。とりわけ数千年にわたる農耕生活が、循環する時間の感得を極めて容易なものにしたであろうことは疑いない。メソアメリカに関して言えば、この地域の主食であるトウモロコシ農耕が人間精神に与えた影響は卓越している。テノチティトランでは、一年はシウィトルと呼ばれる十八ヶ月の暦によって体系化されていたが、この十八ヶ月のひとつひとつの月に行われる儀礼はトウモロコシ農耕の諸段階に直結していた。フランシスコ会士ベルナルディーノ・デ・サアグンの『フィレンツェ文書 (Florentine Codex)』の第二巻にはこの十八ヶ月の儀礼が詳述しており、それによれば最初の月アトルカワロから四番目の月ウェイ・トソストリまでの四ヶ月間は、種蒔きに必要な降雨を祈願する儀礼が主に行われ、続く数ヶ月は発芽した若いトウモロコシの順調な生育を促す儀礼、そして後の数ヶ月はその結実を招来するための儀礼が実行されていた。そして収穫が完全に終わった頃に、十八の月（即ち360日）が過ぎた後にやってくるネモンテミと呼ばれる五日間とともに一年は終了する。その構造は北半球の農耕社会に於ける暦の大半がそうであるように、主要栽培植物の収穫の後の冬至前後に新年が位置するものであった。こうしてメシーカ人にとって一年一年の経過とは、トウモロコシの死と再生を通して顕わになる宇宙のリズムに他ならなかった。この宇宙のリズムはまた、宇宙の一部としての人間存在をも包摂していた。メソアメリカの宗教伝統に於いては、人間の身体がトウモロコシで作られたものとされたり、身体の各部位とトウモロコシの各部位とが同一視されたりする事例は枚挙にいとまがない。つまりそこでは、人間もトウモロコシも生/死/再生という過程を備えた宇宙の一部であったということである。

数千年のトウモロコシ農耕の実践によって、循環する時間、宇宙が死と再生を繰り返すものであるという思考は重要性を増し、これに関連した新たな宗教的創造を促すことになる¹⁾。即ちメシーカ人はこれと同じ死と再生の神秘を、さらに都市というものの中に見いだしたのである。メシーカ人は一年ごとに繰り返される農耕周期より、さらにもう一つ大きな宇宙的周期の中に生きていた。それが52年を単位とした都市の周期であった。

古代メキシコで定住集落の出現とともに農耕経済が確立したのは紀元前2000年頃であり、さらにそれから1000年ほどの時間を経てメキシコ湾岸やオアハカ盆地、メキシコ中央高原といった地域に大規模な神殿建築複合を中心とした都市文明が確立した。以降この地域ではモンテ・アルバン、テオティワカン、トゥーラ、チチェン・イツァ、テノチティトランといった大規模な都市文明が次々に興隆し、また滅亡していった。メソアメリカの歴史とは都市国家の盛衰の歴史であり、それは16世紀のスペイン征服の時まで続いたのである。これらメソアメリカの都市を単に政治的経済的中心としてのみ捉えるのは不適當である。それは都市学者のウィートリーが「祭祀中心ceremonial center」という言葉で示そうとした、近代都市にはないある独特の性格を顕わにするものであった。即ちメソアメリカの都市は王権を中心とした秩序を支える国家的儀礼の舞台であり、何よりもそれ自体が天と地の結合点「宇宙軸」の象徴であった〔Wheatley 1971: 414〕。古代の都市がそれ自体、象徴的宇宙であるとする視点は、近年のメソアメリカ研究に於いて重要なものとなりつつある。特にその空間的象徴構造の解明は進展が著しく、カラスコ、ブローダ、アヴィーニ、アウスティンと

いった研究者は、メソアメリカの都市の様々な象徴構造の解明 — 中心と四方向に区分された都市設計、天体の秩序と建築物との対応関係など — を活発に進めている²⁾。

一方で、メソアメリカの都市のもうひとつの側面としての時間的象徴構造については、必ずしもその解明は進んでいないようである。しかし本来、宇宙とは空間と時間によって構成されるものである以上、都市の空間的象徴構造の解明だけでは、その宇宙としての全体的様相は理解され得ないはずである。この点をカラスコは次のように指摘している。

テノチティトランは「時間を要因とする都市time-factored city」であり、その性格と影響は巨大な曆石、即ち太陽の石と呼ばれるものに彫り込まれた、その運命と使命についての壮大な物語との関連で理解することが出来る。…従来の都市と象徴についての議論は空間的原理を強調し、宇宙的時間及び人間の時間と、都市の性質と生命の間の密接な平行性の要素に注意を払わない傾向があった。メソアメリカの場合、祖型的思考と行為の時間的側面に注意を払う必要があり、アステカ人が…いわば「天体—歴史的思考」とでも呼ぶべきものを備えていたことを認識すべきである。 [Carrasco 1992: 167-168]

こうして本稿の目的は、カラスコが言う「時間を要因とする都市」としてのテノチティトランの性格を明らかにすることにある。具体的にはメシーカ人にとって、都市というものがその時間的側面に於いて死と再生を繰り返す自律的宇宙として成立していたこと、そしてその死と再生が「籠もり」という儀礼的行動を通して実現されるものであったことを論じたいと考える。以下ではまず、上の引用でカラスコがテノチティトランの時間的原理を理解する鍵として挙げている「太陽の石」に刻まれた神話モチーフを検討し、続いて都市の死と再生の営みとしての「籠もり」についての理論的考察を行う。そして最後にこの「籠もり」が明瞭に認められる局面として、52年に一度メシーカ人が行っていた「新しい火の祭」と、16世紀のスペイン人による征服によって引き起こされたテノチティトラン崩壊の出来事を、それぞれ取り上げる。

2. 「太陽の石」と都市周期の神話

直径360センチ、重さ24トンの円形の石に彫刻が施された「太陽の石」は、本来テノチティトランの大神殿の中に収められていたものであり、その製作年代は一般にコルテスが到来したときの王、モクテスマ二世の時代(紀元1502-1520)であると考えられている [Pasztory 1983: 171]。この遺物を一見してまず目を引くのは、中央部に彫り込まれた「4・動き」及びそれを取り囲む「4・ジャガー」「4・風」「4・雨」「4・水」の、計五つのグリフである。これらは中央の「4・動き」が第五番目の時代、つまりメシーカ人とテノチティトランの時代を示し、それを取り囲む四つが「4・動き」以前に滅んだ四つの時代を示すものとされる。メシーカ人の宇宙論を強く反映すると言われる『絵によるメキシコ人の歴史 (*Historia de los mexicanos por sus pinturas*)』と『太陽の伝説 (*Leyenda de los soles*)』の両史料は、この石の意味を明らかにする「五つの太陽」の神話を含んでいる。この神話が「五つの太陽」の神話と呼ばれるのは、この推移する各時代のそれぞれにひとつの太陽が対応しているからである。そこでは太陽とはひとつの時代、ひとつの世界である。こうして最初の時代=太陽は「4・ジャガー」であり、この時代を生きていた巨人はジャガーに食べられて滅んでしまう。二番目の時代は「4・風」であり、この時代は全てが風によって吹き飛ばされ

ることによって滅び、人々は猿になってしまう。三番目は「4・雨」の時代で天から降る火の雨により滅ぶ。そしてこの時代の住民は鳥になってしまう。四番目は「4・水」であり、洪水により世界が滅ぶとされ、人々は魚に変わる。そして最後の第五番目の時代である「4・動き」も地震によっていずれ終焉を迎えるとされる。

このよく知られた神話が、都市の周期的な出現と消滅の神話であることは、既に何人かの研究者によって指摘されている。即ち、最後の第五番目の時代「4・動き」がテノチティトランを中心としたメシーカ人の時代、それに先行する第四番目の時代「4・水」がメシーカ人以前にこの地域でトゥーラという都市国家を繁栄させていたトルテカ人の時代に対応しているのである [Vaillant 1965: 85, Graulich 1990: 90]。この都市の周期的崩壊の宇宙論が、メシーカ人によって極めてリアルなものとして受けとめられていたことは言うまでもない。彼らが極めて大規模な人身供犠の儀礼を行った理由が、自らの時代の終焉を少しでも先延ばしにするためであったことは一般に指摘されている通りであるし、何よりも彼らが数多く目撃していた先行する時代の遺跡の存在自体が、都市というものが崩壊の運命を免れ得ないということの証拠であったろう。テスココ貴族の血をひくメスティソのアルバ・イシュトリルシヨチトルの記録には、神話的都市トゥーラの住民であったトルテカ人についての次のような一文がある。

トルテカとは芸術に優れ知恵のある人のことを指す。なぜならこの国（トゥーラ）は偉大な芸術家の国であって、今日でもヌエバ・エスパニーヤの多くの地域の遺跡、特にサン・ファン・テオティワカンやトゥーラ、 Cholula、その他の多くの村やまちの遺跡に、その技巧を見ることができからである。 [Ixtolilxóchitl 1975: 397]

これは中央高原の先住民たちが、当時自ら目にすることができたテオティワカンやトゥーラ（現在のイダルゴ州のトゥーラ・シココティトラン）を初めとした遺跡を、ただ一つの神話的都市トゥーラのなごりとして捉えていたことを示している。無論、今日の歴史学の視点からすれば、テオティワカンや（イダルゴ州の）トゥーラはそれぞれ時代の違う別個の都市文明である。しかし当時のメシーカ人らの神話的意識に於いては、それらは全て「第四番目の時代」の遺物として理解されていたのである（おそらくはレオン＝ポルティージャが言うように、メシーカ人にとってはテオティワカンこそがトゥーラの文明の中心地であり、遺跡としてのトゥーラはその一部と考えられていたのであろう [León=Portilla 1961:34]）。いずれにせよこれらの遺跡が遺跡であるというその事実が、メシーカ人に強烈な印象を与えたことは間違いない。これらの遺跡を目にする度に、メシーカ人は都市というものが興隆と衰退を繰り返すものであること、そして第五番目の時代としてのテノチティトランもその例外ではないという思いを抱いたはずである³⁾。

3. 「籠もり」について

時間が循環するということは、宇宙が死と再生の循環のリズムを有しているということである。この宇宙のリズムについて理解を深める上で、ここではバシュラールの議論に注目したい。彼は人間とそれを取り巻く大宇宙は、絶え間ない凝縮と膨張の運動を有するものであるという。即ち人は目覚めているときには様々な日常活動を行うのであるが、その時、人は前提として上下や東西南北に方向付けられた世界を与えられている。このことは自明で通常は特に意識されることもないので

あるが、バシュラールはこれを宇宙の膨張運動によって与えられた状態であるとする。それに対して宇宙が凝縮した状態とは、比喩的には人が寝ている状態に例えられ、それは宇宙が未だ成立しておらず、可能的・潜在的状況へと留まっている状態を指す。彼はまたこれを「蛹と成虫」の関係で説明しており、宇宙とは最初に凝縮し潜在的状態へとあったものが、膨張の運動によってその形態を顕わにしたものである。しかし宇宙はまた凝縮の運動を有し、宇宙は再び蛹の状態へと回帰するのだという⁴⁾。

翻ってメシーカ人の宇宙に対する理解を考えると、確かにこの「蛹と成虫」の比喩はその特質を言い当てているように思われる。彼らがいかにして宇宙が成立したと考えていたかは、その宇宙創成神話に端的に表現されているのであるが、以下で見るようにそれはいずれも宇宙が可能的・潜在的状況から漸次的にその形態を顕わにしていく過程として語られる。そうであるとすれば宇宙が死と再生を繰り返すと言うことは、顕在化したものとしてある宇宙が再び潜在化し（成虫から蛹へと回帰し）、そこから再び新たに宇宙が成立することだと言うことが出来る。

さて我々がこのバシュラールの議論を取り上げるのは、何よりも宇宙再生の過程に於ける、「蛹」の状態への回帰の形式として彼が論じる、「籠もり」という象徴的行動に注目するからである。彼によると「籠もり」とは世界との関わりを断ち、そこから隠遁することである。具体的にはそれは「肉体的にはちぢこまり、引き籠もり、身をひそめ、身をかくし、かくれる」ということ、即ち、あらゆる積極的行動を慎み、自らの視界を遮り、静寂の中に身を置くことである。この議論の興味深い所は、この一見して消極的な行動が、逆説的に、ある種の超越性の体験への到達を可能にするという点である。「隠者」、即ち「籠もる」人についての次の一節を参照されたい。

隠者はひとり神のまえにある。隠者の小屋は僧院とは逆の所にある。この中心に向かって凝縮した孤独のまわりには、瞑想し、いのる宇宙、宇宙のそとの宇宙が放射する。小屋は「この世界から」なんの富も得られない。そこには強烈な貧しさの幸福がある。隠者の小屋は貧しさの栄光なのである。財をすててゆけばゆくほど、その小屋はわれわれが絶対の避難所へちかづくのをゆるしてくれる。[バシュラール 1975: 67]

「籠もる」ことは世界の放棄である。にも関わらずバシュラールがそれを内容の欠如や空虚としない理由は、それが「中心に向かう凝縮」とされている点にかかっている。つまり「蛹」の状態とは、膨張したものとして成立している宇宙が、潜在的状況へと凝縮し充実した状態のことである。こうして「籠もり」とは、およそ生命を有するものがその始源へと回帰する行為、一種の胎内回帰として理解される。

転じてメシーカ人の宇宙創成神話にはこの「籠もり」のモチーフが随所に認められる。メシーカ人を含む七つの部族が起源の地チコモストク（七つの洞窟）を出発し、長い放浪の後に約束の地に到着し、そこに彼らの首都テノチティトランを創建したという神話は、征服前後の多くの史料に多く収録されている。そこではチコモストクは、一般に七つの子宮として表現される。チコモストクが子宮であるということは、宇宙創成の最初の局面が空虚よりむしろ充実であることを意味している。

同じ「籠もり」のモチーフはまた、メシーカ人の守護神であるウィツィロポチトリ神の誕生神話にも認められる。サアグンが記録した神話には、この神がテノチティトランの守護神として君臨する以前の状態が次のように記されている。

トゥーラという村のそばにコアテペックと呼ばれる山があり、そこにコアトリクエという女が住んでいた。これはセンツォンウィツナワという兄弟とその姉コヨルシャウキの母であった。コアトリクエはコアテペック山で毎日、掃き清めの修行を行っていたが、ある時、糸玉のような羽の塊が無い降りてきたので、それを手に取り腰巻きの中の腹のあたりにしまっておいた。あとになってとろうとしたが見つからず、そのまま懐妊してしまった。先のセンツォンウィツナワは母が懐妊したことを知るや怒り狂った。…こうしてコアトリクエを殺すことを決めると、センツォンウィツナワたちは母コアトリクエがいる場所へ向かった。…コアトリクエはこのことを知り、ひどく嘆き悲しんだ。しかしその子（ウィツィロポチトリ）は子宮の中で彼女を慰めて言った。「怖れないでください、そのことはよく分かっていますから。」…センツォンウィツナワたちが（コアテペック山に）つくやいなや、かのウィツィロポチトリがテウエウエリという盾と紫色の弓矢をもって（コアトリクエから）産まれた。[Sahagún 1978, bk. 3: 1-2]

こうして誕生したウィツィロポチトリ神が、敵対するセンツォンウィツナワ達を征伐することで、彼を中心とした都市の宇宙が成立する。この神話と先のチコモストクの神話の構造的類似性は明白である。それらはいずれも宇宙の成立以前の潜在的で静的な局面から、その顕在的で動的な局面への移行を語るものである⁵⁾。特にこのウィツィロポチトリ誕生神話は、宇宙の始まりが凝縮と充実であることを端的に表現している。コアトリクエの胎内ではウィツィロポチトリは既に戦う準備を整えて胎内に留まっており、その誕生は暴力的ではあるが、また宇宙の秩序をもたらず創造的威力の解放である。宇宙創成神話についてエリアーデが指摘するところでは、古代人の神話的意識に於いては宇宙が成立する瞬間、様々な事物がその存在を開始するその瞬間こそ、最も力強く創造力に満ちた時である。「すべての創造は充実から開花する。神々はありあまる力、あふれるエネルギーからものを創造する。創造は存在論的実体の過剰から発生する。」[Eliade 1987: 97] 宇宙が新たに創造されなければならないとき、人は最も創造的な瞬間へと立ち返らなければならない。そしてこのような充実の瞬間へと回帰する形式がバシュラールの言う「籠もり」である。

さてそれでは、先に「太陽の石」から窺い知ることの出来たメシーカ人の都市の周期に於いて、我々が「蛹」の局面と呼ぶ、宇宙が成立する瞬間への回帰の形式としての「籠もり」は、いかなるあり方で実現されていたのであろうか。それが見いだされるのは、以下で見ていくように二つの機会に於いてである。即ちひとつはメシーカ人が国家規模で行っていた「新しい火の祭」の儀礼に於いて、もうひとつはテノチティトランが16世紀初頭のスペイン人による征服によって、実際に滅亡せしめられた時のメシーカ人の行動に於いてである。

4. 新しい火の祭

まず最初に「新しい火の祭」について見ていこう。「新しい火の祭」とはテノチティトランを初めとする中央高原の諸都市国家によって52年に一度行われていたとされる大祭である。本稿がこれを都市の宇宙の死と再生の儀礼であると考えるのは、次の理由からである。即ち先に見たように「五つの太陽」の神話は都市宇宙の周期的盛衰の神話であったが、近年の研究によれば、この神話に表明される都市の周期が52年をひとつの区切りとしていたことが明らかになりつつある。つまり「五つの太陽」神話の様々なヴァリエーションに共通した傾向として、そこではひとつの時代＝都市が存続するのが52年、あるいはその倍数の期間であることが認められるのである[Carrasco 1992:

92]。この点で52年ごとに行われるこの大祭は、都市という小宇宙の死と再生の儀礼であると考えることが可能である。このことはまた、以下で見ていくその儀礼の具体的内容からも支持されよう。

この儀礼はまず街の至るところで火が消されることから始まる。そして日没とともに神々の装いを凝らした神官らがウィシャチテカトルという山の頂に向かい、そこで真夜中にプレイアデスが特定の場所を通過するのを合図に生け贄の胸に火をともし、その火を大事にテノチティトランの大神殿に移す。そしてそこから街の各集落、さらに各家庭へとその火がもたらされることで終了する。サアグンはこの儀礼の始まりについて次のように記している。

最初に人々は街中のあらゆる場所の火を消した。そして各家庭に神として祀られていた、木や石で作られた諸々の像は、水の中に投げ込まれた。またすりこぎや炉石も同じようにされた。またあらゆる場所がきれいに掃除された。がらくたは投げ捨てられ、家の中には何も残されなかった。[Sahagún 1953, bk. 2: 25]

家の中に祀られた神々の像が水の中に投げ込まれるということは、アウスティンが指摘するように日常世界の秩序を支える神々が不在になるということの意味している[López Austin 1963: 80]。三つの石で作られていた炉が取り壊されるということが意味するものは明らかである。炉は生命の根源に関わる神である火の神シウテクトリが鎮座する場であり、それが消滅することは家という小宇宙がその中心を失い(象徴的次元に於いて)瓦解することである。これに照応する形で諸々の小宇宙を包含する宇宙としての都市も、大神殿に鎮座する神聖な火が消されることによってその中心を失い、瓦解することになる。「五つの太陽」の神話からすれば、この神聖な火の喪失はひとつの太陽=時代の喪失を意味している。そのような状況の中、人々は暗闇の中でウィシャチテカトルの山頂で再び新しい火が灯され、宇宙が新しく創造される瞬間を待つのであるが、しかしその創造は決して容易なものではなく、常に失敗の可能性にさらされている。

夜が更けると人々は激しい怖れとともに待った。人々は言った。「もし火が灯されなければ、すべてが失われ、すべてが終わるだろう。すべてが闇に沈み、再び太陽は現れないであろう、ツイツィミメ(闇の魔物)らが降り、人々を喰らうだろう。」[Sahagún 1953, bk. 2: 27]

山頂に火がともされるのは、プレイアデスが天空の定められた場所を通過すると同時である。

全ての人々が屋根の上に登った。誰も下の地面にはいなかった。人々は(屋根に)座った。…人々は頭を上げてウィシャチテカトルの山頂をじっと見守った。あらゆる者が緊張の中で、新しい火がもたらされるのを、炎が昇り光を放つその時を待った。わずかの時が過ぎたとき、火がともり、光を放ちながら炎があがるのが見えた。それがあらゆる場所から、遠い場所からも見えた。素早く、全ての人々が耳に切り口を付け、その血をあの火に向かって振りまいた。[Sahagún 1953, bk. 2: 28]

「誰も下の地面にはいなかった」とされるのは、地面にも上の引用に見える怪物「ツイツィミメ」がうごめき、人を襲うとされたからである。ここからして人々がこの祭の間、暗闇と静寂の中

で、極度に行動を抑制された状態で「新しい火」がもたらされるのを待っていたことが分かる。つまり人々は「籠もり」を実行しているのである。この後、突如として炎が輝く瞬間こそが、宇宙創造の力が生き生きと体験される最大の瞬間である。その火は即座に神官によって山頂からテノチティトランの大神殿へともたらされ、さらにそこから各共同体、そして各家屋へと火が運び移されていく。

そして火は広がっていった。その火は神官らの家や各地区に灯された。それは諸々の若者宿にもたらされた。そしてすべての民衆はその火のもとに向かい、火傷するくらいにその火を身に浴びせた。こうして火が素早く各所に行き渡ると、人々は心を静めた。…様々なものが新しく造られ、また炉石とすりこぎも造られた。…それからウズラが生け贄にされ、焼香が捧げられた。人々は香の籠を持ち、それを高く持ち上げて大地の四方向に捧げた。そしてそれを炉に投げ込んだ。[Sahagún 1953, bk. 2: 29-31]

こうして家屋という小宇宙に炉という中心が回復する。香の籠が四方向へと捧げられることや、各家庭で家財道具が新調されることは、この大祭を通して宇宙の基本的な方向付けが回復され、日常世界の刷新が成功したことを意味している。頭在化した宇宙へのこのような移行は、象徴的次元に於いて先のメシーカ人の神話の都市の神、ウィツィロポチトリの誕生と勝利に等しい事態である。あるいはこの大祭の特徴である、生成の力を秘めた火に与ることを通じた宇宙の刷新のモチーフは、我々にメシーカ人のもう一つのよく知られた宇宙創成神話を思いださせるであろう。それはテオティワカンに集った神々が、自ら聖なるかがり火に身を投じることによって太陽と月に変身したというものであり、暗闇の中から出現した太陽とその東の地平からの出現は、まさに「新しい火の祭」に於いて認められるモチーフそのままである。

5. 征服時の「籠もり」

以上が「新しい火の祭」の全容である。そこにはテノチティトランの死と再生が、バシュラールの言う「籠もり」を通して、極めて大規模に、また確立された神話的儀礼的枠組みの中で実現されていた様子が読みとれたのではなかろうか。続けて以下で検討するのは、16世紀のスペイン人による征服の時にメシーカ人がとった一連の行動である。

コルテス率いるスペイン人征服者らがメキシコ湾岸に上陸したのは1519年、メシーカ人の暦で「1・葦」の年のことである。この年はメシーカ人の神話伝説では、かつて追放されたトゥーラの王、トピルツィン・ケツァルコアトルが帰還し、再び王権を取り戻すと予言されていた年であった。そして実際にメシーカ人らがコルテス一行をこの神であると見なし、彼らを容易にテノチティトランに迎え入れ、結果としてそれが彼らの都市国家の崩壊の一因となったことは周知の通りである。この興味深く、また複雑な性格を持ったケツァルコアトル伝説については既に幾つかの優れた研究が提出されており、本稿ではこれを直接問題にすることはしない⁶⁾。重要なことはカラスコが先に指摘したようにテノチティトランは「時間を要因とする都市time-factored city」であり、スペイン人到来以前よりメシーカ人はその崩壊が不可避であるのを知っていたということ、そしてこの征服を自らの神話的枠組みの中で自律的に意味づけし、受けとめることが出来たということである。このことは以下で検討していく、征服後の史料の中に語られたテノチティトラン崩壊前夜のメシー

カ人の具体的行動を見ることで、よりよく理解されるはずである。なぜなら、都市の死と再生の形式としてここまで論じた「籠もり」のモチーフが、この局面に於いても明瞭に認められるからである。以下ではテノチティトラン崩壊時のメシーカ人の行動を知るための重要な史料として、ここでは特にメシーカ人に極めて近い立場から歴史が語られている、いわゆる「クロニカX⁷⁾」系の史料であるディエゴ・ドゥランの『ヌエバ・エスパーニヤ誌*Historia de las Indias de Nueva España*』及びアルバラード・テソソモクの『クロニカ・メヒカーナ*Crónica mexicana*』の記述を参照しつつ考察を進めていく。

さて一般に中央高原に由来する史料には、スペイン人到来前夜に様々な出来事（天体の異変、怪物の出現、神殿の焼失、等々）が起り、それらがいずれも目前に迫ったテノチティトランの崩壊の予兆として受けとめられたとする記述が数多く認められる。とりわけ1508年、メシーカ人の暦で「3・火打ち石」の年に出現したとされる彗星が、テノチティトランの住民に与えた影響は、ただならぬものがあつたようである。『クロニカ・メヒカーナ』は深夜に出現したこの彗星について次のように描写している。

東の方角より濃い煙が出現するのが見え、それは真っ白に輝き、明るかった。真昼のようであつた。それは大地から天空へとまっすぐに巨大化しながら進み、まるで白い巨人が歩いているかのようなだつた。 [Tezozómoc 1987: 653]

一般に近代以前の伝統的社会に於いてそうであるように、メシーカ社会に於いても彗星は不吉な出来事を知らせる予兆と受けとめられていた。史料が語るところでは、これに動揺した当時のテノチティトランの支配者、モクテスマ二世は早速この予兆が一体何を意味するかを知るために、同盟都市テスココのネサワルピリ王に使いを出し、その意見を聞こうとする。『ヌエバ・エスパーニヤ誌』にはこれに対するネサワルピリのする答えが、次のように記されている。

これは我々のくにとつて悪い兆しである。とてつもない、恐るべき事が我々に起こるのであろう。我々の土地、我々の領土の全てに災厄と不幸が降りかかるであろう。何一つ残りはしないであろう。数え切れぬほどの死があるであろう。我々の領土は全て失われるであろう。それは高いところの神、昼と夜と空気の神のこころによるものなのだ。 [Durán 1984: 469]

このようにネサワルピリの答えは恐るべきものであつた。それは「高いところの神、昼と夜と空気の神」と称される、創造と破壊を司るテスカトリポカ神の介入によって、第五番目の太陽としてのメシーカ人の時代が遂に終焉を迎えようとしていることを知らせるものだったのである。宗教的知識に関して絶大な信頼を受けていたと言われるネサワルピリ王の回答は、モクテスマ二世にその避けられぬ運命を覚悟させるに充分であつたようである。モクテスマ二世は次のように嘆き悲しむ。

あらゆるものの創造者よ、生と死を与える力強い神よ。数々の力強い王達のあとに、なぜこの私にメシコの不幸な崩壊を目撃する運命を与えられたのですか。私は娘達と息子達の死を見なければならぬのですか、自らの強大な国と領土と臣民を失い、メシーカ人がその力強い腕と力強いこころによって征服し獲得したものを失うことを、目撃しなければならぬのですか。何をす

ればいいというのか。私はどこに隠れればいいのだろう。どこに私は入り込めばいいのだろう。ああもし私がこの瞬間に石か木になれば、何でも良いからその辺のものに変身できれば…。

[Durán 1984: 469]

上の二つの史料では、以上に見た彗星の出現という出来事は、モクテスマ二世のコルテスへの自発的服従に至るまでのテノチティラン崩壊の過程の始まりとして位置づけられている。もとより征服後に書かれた史料の中のこの一節が、実際の歴史的出来事をどこまで忠実に反映するものかという疑問はある。とはいえ1508年頃に彗星が出現したということ、そしてこれをメシーカ人が程度の差こそあれ不吉なものとして、自らの都市の存亡に関わる予兆として受けとめたということ自体は間違いない⁸⁾。この悲観的態度を理解する上では、また当時のテノチティランの社会的状況を踏まえておくことも重要である。コンラッドの議論によれば、このモクテスマ二世の時代はテノチティランの政治的・経済的・宗教的システムが行き詰まりを迎えていた時代であった。彼によればこの時代にはメシーカ人は周辺地域の軍事的反乱に多く悩まされており、またモクテスマ二世が行った社会改革が都市の活気を奪い、一種の社会停滞を引き起こされていたという。さらに、一世紀ほどの間勢力を拡張し続けてきたメシーカ人が、この頃には近隣のタラスコやトラスカラなどの勢力との戦いに敗退し、生け贄の儀礼に用いる捕虜獲得が難しくなった。結果としてメシーカ人は太陽を生け贄により養うという、いわゆる「太陽の民」としての宗教的義務が十分に果たせないという焦燥感に襲われていたという [Conrad 1984: 57-69]。

さて我々が都市の死と再生の形式としての「籠もり」を見いだすのは、この彗星の出来事の後にはモクテスマ二世がとったと語られる行動に於いてである。上のモクテスマ二世の引用の最後（「私はどこに隠れればいいのだろう」「どこに私は入り込めばいいのだろう」）に端的に現れているように、都市の滅亡の運命に対するこの王の態度は極度に消極的で逃避的である。そしてこのような状況の中で彼が取った選択は、大地の中にあると言われるシンカルコ（トウモロコシの家）へとわずかな家来を連れて逃げ込むことであった。それは次のような場所であった。

それは楽しみと喜びの場所であり、そこでは人は永遠に生きる。…それは清澄な水の場所であり、あらゆる種類の食べ物が成長し、あらゆる新鮮な花に満ちた、並ならぬ豊饒の場所であった。 [Durán 1984: 493]

後にモクテスマ二世は、湖の中（にある小島？）にある洞窟からこのシンカルコへ入り込もうとする。同箇所（英訳版）の注でヘイデンが指摘するとおり、この場所が象徴的には大地の中に住まう水の神トラロクの楽園、トラロカンと同質のものであることは間違いない。トラロカンは神話的楽園であり、一般には水死あるいは水に関係した死を迎えたものだけが行くことが出来ると考えられていた場所である。この点でまず我々はこのモクテスマ二世の行動が、メシーカ人が慣れ親しんでいた神話的儀礼的枠組みに従ったもの、つまり「新しい火の祭」と同様に「籠もり」を志向するものであることに気づくのである。なぜならこのシンカルコ＝トラロカンはあらゆるものを生み出す豊饒の場所であり、それは象徴的には先に「籠もり」によって到達される体験的境地の表現として論じた、大地の子宮チコモストクやコアトリクエの胎内のもうひとつの表現であると考えられるからである。ここで主題として語られていることがモクテスマ二世による「籠もり」であるということは、何よりもシンカルコの王であるウェマクが使者を通してモクテスマ二世に、シンカルコに入るために次のような条件を果たさなければならないと告げていることから理解される。

もし彼がここに入り、望みを果たしたいというなら、80日の苦行をなさなければならない。その間は王宮の食べ物を食べたり、上等な飲み物を飲んではならず、ただ水に溶かした種を食べよう。水は熱いものを飲み、女人からは離れて近づかず、この80日の間は王座に座することも、統治を行うことも、王のマントを着ることもなく、ただ華美を遠ざけ苦行用の衣服を身に着けるよう。[Durán 1984: 495]

ウエマクがここで求めていることの意味は明白である。モクテスマ二世は王の食事と服装を放棄し、「王座に座ること」を放棄するように求められている。それは単に王の特権を捨てよというような簡単なものではなく、むしろ王というあり方に於いて世界を与えられている彼に対する、その世界自体を放棄せよという要求である。即ち通常はひとは王であれ平民であれ、必ずや「何者か」として世界内の諸事物に関わり、また自らの世界を与えられているわけであるが、この場合モクテスマ二世はその「何者か」であること自体を放棄し、いわば「何者でもない」状態へとなるように要求されているのである。この後に、実際にモクテスマ二世は80日間の苦行を行ったと語られる。即ち彼はウエマクの指示に従って、王としての自己を放棄し、「籠もり」を行ったのである。「籠もり」は絶対的な消極性に身を置くことによる、宇宙創成が始まらんとする豊饒な瞬間への回帰の営みであった。そしてモクテスマ二世が苦行をすることで到達しようとしているシンカルコもまた、「あらゆる種類の食べ物が成長し、あらゆる新鮮な花に満ちた、並ならぬ豊饒の場所」なのである。

さらに重要なことは、この「籠もり」が王によるものだけということである。理論的にはひとはどのような立場のものであっても「籠もる」ことは可能である。しかしながらこの場合問題になっているのはモクテスマ二世という個人の死と再生ではなく、むしろ都市宇宙の中心としての王の死と再生である。タウンゼントは次のサアグンの記録に見える、王に対する呼びかけの部分をひきながら、メシーカ人にとって王の身体と宇宙の中心としての世界樹との間には極めて密接なアナロジーが存在していたことを指摘する。

汝は糸杉である

汝は絹の木である

汝のもとに

人々は木陰を探すであろう

彼らは木陰を探すであろう

[Townsend 1979: 39]

こうして王が王であるということを放棄し「何者でもなく」なるということは、都市が中心を喪失し、その宇宙が瓦解することに等しい。興味深いことにサアグンの史料の一節からは、この都市の危機的状況に於いてモクテスマ二世が「籠もり」を行ったように、テノチティランの民衆も様々な活動を停止して「籠もり」を行っているようなのである。この様子は次のように語られている。

その頃ここメシコは静まり返り、誰も家から出ず、こちらへ来る者もなかった。母親はもはや子供を外に出さず、道には人影もなく、人の子一人おらず、まるで夜明けのように人気がなかつ

た。誰も通りを横切らず、前を通る者もいなかった。人々は家に閉じ籠もり、ただ嘆き悲しむのであった。人々は、「どうとでもなれ、恐ろしいことだ、ほかに何ができようか。我々は死ぬであろう、滅びるであろう。こうしていま死を待っているのだ」と言った。[Sahagún 1981, bk. 7: 32]

この民衆の「どうとでもなれ」という言葉こそ、世界を根本的に放棄し「何者でもない」状態へと彼らが向かいつつあることを端的に示すものである。さてこの後、史料は80日の苦行を終えたモクテスマ二世が、数人の伴を引き連れてカヌーで湖に乗りだし、洞窟の側でウエマクが現れるの待つか、結果としてこの王の行為を遺憾に思った家来達によって元の王座に連れ戻されてしまったと語る。そしてまもなく東の海より武装したスペイン人が現れ、それをケツアルコアトル王の再来と考えてテノチティトランに迎え入れたモクテスマ二世は、最終的にはスペイン人、あるいは失望した家来によって殺され、テノチティトランは遂に征服されてしまう。こうしてモクテスマ二世は結局の所、シンカルコへの逃避に失敗するのであるが、この結末自体は我々にとってはさほど重要なものではない。重要なことは史料に語られる、都市の終末という局面に際してモクテスマ二世とテノチティトランの人々がとった行動が、ちょうど「新しい火の祭」の場合と同じように「籠もり」のモチーフを顕わにするものだという点である。スペイン人の到来はメシーカ人にとって自らの都市の終焉を意味するものであった。しかしながら彼らが自らの神話的枠組みを保持し続ける限り、それは同時に新しい都市宇宙の再生の機会でもある。それ故に我々はこの局面に於いても、都市宇宙の再生のための「籠もり」を認めることが出来るのである。

6. 最後に

以上、メシーカ人にとって都市というものが死と再生を繰り返す宇宙としてあり、その死と再生が特に「籠もり」という特殊な儀礼的行動を通して実現されるものであったことを論じた。本稿の目的は従来その象徴的空間構造の解明に重点が置かれていた都市の宇宙論の研究に対して、新たに時間論的視座を導入することでその全体的理解を試みるというものであった。そして都市が「籠もり」を通して周期的に再生するものであるという視点を持つことで、少なくとも「新しい火の祭」や征服期のメシーカ人の行動といった重要な局面に対する、ひとつの解釈枠組みを提示することは出来たのではないかと考える。

註

- 1) アウスティンはアルケタイプとしてのトウモロコシの意義を次のように指摘している。「アルケタイプは繰り返された慣習的行為の中から生まれ、それは宇宙に於ける知覚と行為の核心となる。メソアメリカの文化的一体性の根本要因のひとつとして、トウモロコシ農耕の一般化と発達がある。…メソアメリカの諸社会の社会的政治的な諸特殊性にも関わらず、ある共通した要素—トウモロコシ栽培—はその宇宙観と宗教を、メソアメリカの多様な人間集団間のコミュニケーションの優れた道具とすることを可能にした。」[López Austin 1994: 16]

アウスティンのこの指摘は、メソアメリカの宗教伝統に於けるトウモロコシ農耕の意義を的確に言い表したものであると言えよう。ただしトウモロコシがアルケタイプ(祖型・模範型)であると言うとき、それが「繰り返された慣習的行為の中から生まれた」ものであるとする視点に対

しては部分的な修正が必要である。トウモロコシは死と再生を経るといふあり方に於いて、確かにアルケタイプとなりうるのであるが、死と再生の神秘自体は宗教的ア・プリオリと言うべきものであり、それはトウモロコシ農耕によって生み出されるといふより、むしろそれを通して顕わになるものなのである。それは繰り返せば、この植物の存在様式が、人間の根本的な存在様式に照応するものであったためである。エリアーデの言葉を用いれば「宗教的創造性は、農耕という経験的現象ではなく、植物のリズムの裡に認められる生、死、再生の神秘によって生み出される」のである [Eliade 1981: 73]。

- 2) その最新の成果としてカラスコ編の『メソアメリカの古典的遺産 *Mesoamerican Classic Heritage*』（文献一覧参照）をここでは挙げておく。
- 3) 実際、「太陽の石」の中央部に彫り込まれた顔は大地の神トラルテクトリの顔であり（これを太陽の顔とする説があるが十分な根拠はない）、これはメシーカ人の時代が大地震によって滅ぶと予言されていることに対応している [Townsend 1979: 67]。それはあたかも「太陽の石」の発するメッセージが、都市というものが崩壊を免れ得ないものであるという点にあるかのようである。
- 4) バシュラールの次の一節を引用しておきたい。「存在の休息とその飛翔、夕の結晶と昼に向かってひらかれる翼とをかたる二つの夢が合体する。まちと大洋と人間と宇宙を支配する翼ある城の肉体のなかに、かれは藁葺き小屋をのこしておき、このうえなく大きな休息のなかにとじこめるのであった。」 [バシュラール 1975: 101]
- 5) アウスティンはメソアメリカの宇宙創成神話の一般的構造として、そこに「神々の非卓越の時間」と彼が呼ぶ、宇宙創造以前の停滞した静寂の局面と、「神々の卓越の時間」という、神々によって天地や動植物が次々に創造されていく局面とが認められることを指摘している [López Austin 1996: 484]。これは大枠に於いて、我々の議論に於ける「蛹」と「成虫」の二局面に対応していると言って良い。
- 6) この問題に関してはカラスコの『ケツァルコアトルと帝国の皮肉 *Quetzalcoatl and the Irony of Empire*』及びトドロフの『他者の記号学』を参照されたい。（文献一覧参照）
- 7) 「クロニカX」の基本的性格とその成立の問題に関しては、本誌前号に掲載された井上氏の「『クロニカX』—研究史と問題点」を参照されたい。
- 8) ここではテノチティランの運命を刻み込んだ「太陽の石」がモクテスマ二世の時代に作られたということ、及び、この王のホルテスへの自発的服従が紛れもない歴史的事実であることを指摘しておけば充分であろう。

文 献

Alva Ixtolilxóchitl, Fernando de

1975 *Obras históricas*, Edmundo O’Gorman, ed., vol. 1, UNAM, Mexico.

Alvarado Tezozómoc, Fernando

1987 *Crónica mexicana*, Manuel Orozco y Berra, ed., Editorial Porrúa, Mexico.

アタリ、ジャック

1986 『時間の歴史』、蔵持二三也訳、原書房、東京。

バシュラール、ガストン

1975 『空間の詩学』、岩村行雄訳、思潮社、東京。

Carrasco, David

1992 *Quetzalcoatl and the Irony of Empire*, The University of Chicago Press, Chicago.

Carrasco, David, Lindsay Jones and Scott Sessions, ed.

2000 *Mesoamerica's Classic Heritage*, University Press of Colorado, Boulder.

Conrad, Geoffrey and Arthur Demarest

1984 *Religion and Empire: The dynamics of Aztec and Inca expansionism*, Cambridge University Press, Cambridge.

Durán, Diego

1984 *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme*, vol. 2, Editorial Porrúa, Mexico.

1994 *The History of the Indies of New Spain*, Doris Heyden, trans., University of Oklahoma Press, Norman and London.

Eliade, Mircea

1981 *A History of Religious Ideas*, vol. 1, Eillard R. Trask, trans., The University of Chicago Press, Chicago.

1987 *The Sacred and the Profane*, Harcourt Brace and Fompany, New York.

Graulich, Michel

1990 *Mitos y rituales del México antiguo*, Ediciones Istmo, Mexico.

Historia de los mexicanos por sus pinturas

1965 "Historia de los mexicanos por sus pinturas," in Angel María Garibay K., ed., *Teogonía e historia de los mexicanos*, Editorial Porrúa, Mexico.

Ixtolilxóchitl.

See Alva Ixtolilxóchitl, Fernando de

Léon=Portilla, Miguel

1961 *La filosofía náhuatl*, UNAM, Mexico.

Leyenda de los soles

1992 "Leyenda de los soles," in *Códice Chimalpopoca*, P. F. Velázquez, trans., UNAM, Mexico.

López Austin, Alfredo

1963 "Fiesta del fuego nuevo," *Anuario de Historia*, vol. 2, UNAM, Mexico.

1994 *Los mitos del tlacuache*, UNAM, Mexico.

1996 "La cosmovisión mesoamericana," Sonia Lombardo and Enrique Nalda, in *Temas Mesoamericanos*, ed., INAH, Mexico.

Pasztory, Esther

1983 *Aztec Art*, Abrams, New York.

Sahagún, fray Bernardino de

1953-1981 *Florentine Codex*, Book 2, 3, 7., Arthur J. O. Anderson and Charles E. Dibble, trans., The School of American Research and The University of Utah, Santa Fe, New Mexico.

トドロフ、ツヴェタン

1986 『他者の記号学』、大谷尚史他訳、法政大学出版局、東京。

Tezozómoc.

See Alvarado Tezozómoc, Fernando

Townsend, Richard

1979 *State and Cosmos in the Art of Tenochtitlan*, Dumbarton Oaks, Washington D. C.

Vaillant, George

1965 *The Aztecs of Mexico*, Doubleday, New York.

Wheatley, Paul

1971 *The Pivot of the Four Quarters*, Aldine, Chicago.

Death and Rebirth of Tenochtitlan

Takashi Iwasaki
(University of Tsukuba)

Key Words: Aztecs, Mexica, city, cycle, myth and ritual

One of the main scholarly topics in previous mesoamerican studies is the cosmology by which ancient cities were organized and sustained. Interdisciplinary researches by historian, archaeologist, anthropologist, historian of art and of religion have been done, and the symbolic characters of those mesoamerican cities like Monte Alban, Teotihuacan, Tula Idalgo, Tenochtitlan, are being increasingly clarified.

Today, it is well known that those cities contained in their symbolic spatial structure a sacred mountain, spring, cave and the order of a heavenly body, meanwhile, an inquiry of their temporal structure seems to be left behind. As David Carrasco, historian of religion and specialist of mesoamerican religious traditions, has pointed out that the mesoamerican cities are “time-factored cities” whose destinies are firmly intertwined with the biological process of human beings and cosmos, and the studies which only investigate cities’ spatial character turn to be unavoidably one-dimensional.

Thus, the aim of this essay is to make clear the temporal structure of the Aztecs’ capital, Tenochtitlan (A.D.1325-1521). At the heart of this capital Tenochtitlan was the Templo Mayor, in which a number of important religious festivals were held. Four main streets, which extended from the temple toward each of the cardinal directions, divided the city into four districts, and gave it a highly symbolic urban design. The discussion on the temporal structure of this symbolic city is started by an examination of Aztec religious relic, the *Piedra del Sol*, which shows a famous mythic motif of the Fifth Sun, and it will be shown that this myth expresses rhythm of urban civilization which undergoes death and rebirth.

The next part is theoretic one, which discusses an interesting idea of “confinement,” a terminology of French philosopher Gaston Bachelard, which, according to Bachelard, is a symbolic method to return to rich and creative moment of the creation of cosmos. More particularly, the “confinement” is to shut out any outer information, and to renounce any personal relationships to the world. This discussion will help us to understand what the death and rebirth of cosmos means.

In the following two chapters, I will examine opportunities in which the death and rebirth of city’s cosmos were tried: the one is a famous Aztec festival, the New Fire Ceremony, in which all fire of hearth of household and the Templo Mayor is extinguished, and people stops every social activities. The way people tries to realize the death of city’s cosmos corresponds to “confinement,” which we examined the previous chapter.

The other is the concrete behaviors which the final Aztec king Moctezuma II and people of the city showed in the eve of the Spanish conquest. In their behaviors, we will realize a completely same structure which we find in the New Fire Ceremony. The fact that we find the “confinement” in the activities of people of Tenochtitlan, means the destruction of their city by Spanish conquerors was nothing but a opportunity of the death and rebirth of the city for Moctezuma II as well as common Aztec people.

In the last analysis, we will understand a city for Aztecs is a living entity which undergoes the process of death and rebirth, through a specific ritual activity of "confinement."

